

## フランス近代法研究班

荻原 貞正

1. 当研究班は、フィリップ・サニヤック著「フランス革命における民事立法」の研究、翻訳を行っている。夏季・冬期の休暇を除いて、大体、一ヵ月に二回程度、定期的に研究会を開いている。2007年には、1月13、27日、2月10、3月9、23日、4月7、21日、5月12、26日、6月2、16日、7月7、21日、10月10、24日、12月15、22日 各月日に研究会を行った。

(1) 第二節 土地制度の廃止—土地の開放—

第一款 土地制度及び憲法制定会議 113頁の5行目～118頁の10行目までの翻訳・研究については、「大東法学」第一六巻第二号に掲載される。

(2) 同節同款的113頁11行目～130頁の8行目までの翻訳・研究については、「大東法学」第十七巻第一号に掲載される。

以上が、2007年1～12月までの研究班の活動報告である。

## 2. 「雨ニモ負ズ、風ニモ負ズ」 —研究会15年、「大東法学」連載30回記念特別報告—

貴田 晃

<その1>

ある土曜日の午後二時過ぎ（後でわかったのだが、この日は一時的に暴風警報が出ていた。）

L——今日は雨が強いですね。

CP——いや風もずいぶん出て来て、台風が来ているらしいです。十月末だというのにめずらしいですね。

L——今日は中止の命令が出るかと期待していたのですが。

CP——私もCから電話がはいるかと思っておったのですが……

それから10分余り後に、Aが姿を見せられて。

A——何かCから命令はありましたか。

CP——いえございませんが、今日は早くやめましょう。電車が停まるとまずいです。風雨はますます強くなってくる。こんな話をしていると、「やあ」といって重装備のCがあらわれる。

L——ひどい天気でございますが……

C——うむ。昭和19年10月のレイチ沖海戦の折も、今日と同じよう季節はずれの台風がきて……

L——武蔵が沈んだという作戦ですか。その風は神風になったのですか。

A——ハイハイ、それまで。テキストを早く読んで、今日は早く終りにしましょう。

さて、ここでわれらがレジマンをご紹介いたしましょう。

1. コロネル（略称C）——ご存知エコール・ミリテールのご出身だが、「眠素」がご専門。時にコナクリ、カルタゴなどの地名が話に出るので、その昔、フランス外人部隊としてアフリカ遠征に加ったといううわさもある。ハンニバルの生まれかわりではないでしょう。

2. キャピテンヌ（CP）——旧制度下の第一身分。N司教座聖堂参事会会員。本年をもって予備役にまわられる。少々さびしくなる。

3. アドジュダン・マヨール（A）——巷ではプレジダント（会長）と呼ばれている。

旧パルルマン大審部部長国王評定官のことで、モンテスキューと同格である。

4. セルジャン（S）——実力はコマンダンだが話が長いのが特徴。通信部門の担当。現在はシャップ式腕木信号機なるものを研究中。ヴァンセンヌの陸軍省文書館には顔パスで入場している。

5. サンプル・ソルダ（L）——ただ一人のリサンシェ・エス・レットル。日々アン・ドロウたちに囲まれ孤軍奮闘している。この怪文書の作者でもある。

以上の5名以外に旅団参謀（エタ・マヨール）1名。さらに師団騎兵大隊士官の1名が外からお見えになり、強力な援軍として、われらのレジマンをご支援いただいております。

<その2>

ある晴れた日に（沖を見れば煙が立っていたわけではありません。）

L——先日話題に出ましたジャン・ド・ロワですが。

C——あれはロンム・ド・ロワと同じだよ。

L——たまたまバルザックの小説にその話がでていまして、それを訳注に使おうかと思っておりますが、文士の書いたものですから、いかがなものかと思ひまして…。

C——うむ、まあいいだろう。ところでバルザックは法学部の出身だろう。

L——リサンシェ・アン・ドロワであったかどうかわかりませんが。ところでムッシュ！セルジャン、ロベスピエールは、グラデュエ・アン・ドロワなりや。

S——いやちがうね。サン・ジュストは大学を出ているがね。

L——ロベスピエールは、ランスで戴冠式を終えたルイ16世に、コレージュ・ルイ・グランを代表して祝賀の辞をラテン語で述べたというのは聞いてますが。

S——そう、またアラスの弁護士であったことも確かだ。

L——それでは、グラデュエはないのに弁護士になれたのですか。

C——ふむふむ。なかなかおもしろいことになって来たな。

L——ちょっとお待ち下さい。(書棚から本を取り出して) えーと、

C——なんだそれは。

L——昔の京大の人文研が出した「フランス革命研究」ですが、ここの後の方に人名解説がのっていたはずですよ。えーと。こんなことが書いてあります。

ロベスピエールは一七八一年にルイ・グランを卒業。成績優秀、品行方正によって賞金と、パリ高等法院から弁護士の免状をうけ、秋にはアラス高等法院弁護士となる。これはいわゆる特免状をもらったということですか。

C——そういうことになるな。

S——それにしてもグラデュエではないなあ。

C——もっと詳しく調べて、いずれ報告しなさい。

L——はいはい なるべく早めに調査しまして、ご報告いたします。

### <その3>

さていよいよ本年もどうやらつつがなく年の瀬をむかえ、本日は冬至であります。空は朝方から厚い雲におおわれ、昼頃から小雨が降りだし、温度も上がらず、寒さが身にしみる日です。本日はA殿が出張でありますので、無駄話するにはまことに都合がよく、C閣下との一見無駄にみえ、実はなかなかかくれた貴重な歴史の一面と思われまますので書きとめておきました。

- L——ちょっと質問があります。
- C——なんだい。
- L——旧制東京高校文丙は入学時20名で、卒業は16名でございましたね。
- C——うん、4名は途中病気になったから。成績が悪かったわけではないぞ。
- L——それで、第一語学のフランス語は週何時間でしたか。授業は50分でしたね。
- C——一年のときは8時間つまり4コマだったが、二、三年は12時間だったぞ。ちょっとまてよ、Kが4時間YとMにも同じだけ習ったのだから、12時間にまちがいない。同じ日に午前2時間、午後2時間という日もあって、またYの講読は「コントラ・ソシアル」を読まされて往生したよ。まあ語学学校だよ。旧制高校というのは。
- L——ルソーを読んだんですか。第二語学の英語はどうでした。ロックなんか読まれたと以前にうかがいましたが。
- C——そうそう何だかやたらに難しいテキストを使うのだな語学の教師は。時間数は4時間だった。英語のクラスも単独、つまり文乙と合併ではなかった。一学年の定員は、文甲は40名、文乙は20名、理科は文科の2倍で160名だった。
- 語学以外にも倫理学、西洋史などの教養科目もいろいろあったよ。西洋史のH先生は一年間でギリシア・ローマをテーマに終ったところは、スパルタクスの乱まで。後は自分で本を読んで勉強した。
- L——さて学部への入学試験ですが、試験科目は外国語はフランス語のみでしたね。
- C——そうフランス語だけ。それ以外に専門の論文試験が二種類あって、長文を書かせるのと、用語の解説を略述する小論文もあった。試験時間、これは長かったね。全部で6時間ぐらいだった。
- L——法学部へは文丙からは現役、浪人あわせて4名でしたか。
- C——そう。例のMは文甲から、あのTは文乙からどちらも一年遅れで入学してきた。

さて、いよいよ佳境にはいってまいりました。この合格にはイエナ戦役におけるナポレオンの勝利にも比すべき、高等作戦計画があったのですが、長くなりますので次回のお楽しみにて御期待ということで一まず筆を置きます。

なお、本研究会に対するご教示、ご質問、ご批判等なんなりとお寄せ下さい。心よりお待ちしております。